

松岡典子 さん

●NPO法人MCサポートセンターみつくみえ代表

一人一人のお母さんからの相談が、ほかの多くのお母さんを救う鍵に

松岡典子さんが、三重県桑名市でNPO法人MCサポートセンター「みつくみえ」を立ち上げたのは、平成12年のこと。以来、代表として20年にわたり、地域のお母さんや子どもへのあらゆる相談に乗り、笑顔になるための支援活動が続けてきた。その松岡さんに、これまでの活動内容や、昨今のコロナ禍での状況の変化、支援活動への思いなどを伺った。

●取材・文……………白井美樹（ライター）

MCサポートセンター「みつくみえ」を有資格のママ友とともに

助産師として総合病院に勤務した後、看護学校で講師も勤めた松岡さん。「みつくみえ」を立ち上げるに当たっては、どのような経緯があったのだろう。「かつての私は、助産婦の役割のほとんどが、『無事に出産させて退院させる』ことだと思っていました。ところが、いざ自分

が妊娠・出産を経験してみると、退院した後、すごく孤独で不安になることが分かったのです。そこで、私自身の子育てがひと段落したところに、自分の資格を生かして地域のお母さんたちの役に立つ活動をしたいと思うようになりました」

最初は、一人で電話相談からスタートした。すると、まもなく、運命的な出会いが訪れた。共通の思いを抱いていた地元の心理カウンセラーの女性が、松岡さんの活動を聞き、連絡をくれたのだ。そして、「お

母さんたちをしつかりバックアップできる体制をつくらう」という彼女の勧めもあり、NPO法人化へ動き出したのだという。

「もともと、組織づくりに当たっては、多職種の人たちが必要だと考えていました。お母さんを支えるには、栄養の話や病気の話なども出てくるはずだからです。

幸いなことに、周りを眺めると、ママ友の中には、管理栄養士、看護師、保育士などの有資格者がたくさんいました。そういうママ友たちを誘い入れて、NPO法人M

Cサポートセンターみつくみえの活動を開始したのです」

当初は、電話相談を柱に、年中無休の体制を整えた。しかも、9時から21時まで電話の前で待機するといった、かなり無謀ともいえるスタートだった。そうした背景に

は、自分たちが経験してきた子育てのリアルがあったという。お母さんが困ったときに、いつでも相談に乗れるように、休みをつくってはいけないと感じていたからだ。「21時に電話を取れば、どうしても終わるのは、深夜の23時くらいになってしまいま

す。やがて、これでは自分たちの家庭崩壊を招きかねないと痛感し、18時までに時間を減らしました。やはり、思いだけで貫き通せるものではないし、やれる限界を知った上で活動するべきだと学びましたね」

ある事件をきっかけに行政との連携がスムーズに

電話相談の後に、面談まで進むケースもある。その初めての面談では、スタッフ一同、衝撃を受けたという。拒食症を患っているママのケースで、実際に会ってみると、30数キしかないほどにやせていたのだ。

「電話時に想像していたよりも、はるかにシビアな面を抱え込んでいるんだということが分かり、さらに大きな覚悟をもって支援に当たらないといけないと、あらためて肝に銘じました」

しかしながら、手を尽くして支援をしていても、助けられなかったケースもある。最も悲しかったのは、若いママが赤ちゃんを虐待死させてしまい、事件となり、逮捕されたケースだ。

「彼女からの相談を受け、県や市の関連機関につなげ、前向きに子育てができるようになることを願っていた矢先の事件でし



Profile

●まつおか・のりこ●

助産師として医療現場で勤務後、2000年に団体を立ち上げ、保健・医療・福祉の専門職のメンバーらと共に、年中無休で妊娠期から子育て期の女性・思春期の子どもたちからの相談に乗り、行政機関と連携し地域支援の実践を行う。子育てや思春期に関する講演は年100件程度。虐待予防や子育て関連の各種委員にも就任。一般社団法人全国妊娠SOSネットワーク理事。

た。後から聞けば、行政の関わりがゼロだったそうで、ショックを受けましたね。面会した弁護士さんから、『みつくみえさんにはすぐ助けてもらった』と彼女が言っていたと聞いたときには、涙が出ましたが、赤ちゃんを助けられなかったのはとてもつらかったです」

一方、この事件がきっかけとなって、行政とのやりとりがスムーズになっていった面もある。県が民間とも積極的に連携を強めようと動いたため、その後は議会で取り上げられるようになり、児童相談所に通報したときにも、フィードバックをもらえるようになったのだそう。そして、保健師さんとのネットワークも密になっていった。

「今はほとんどのまちの保健師さんとのやりとりがスムーズになっていますね。支援依頼が来たり、一緒にケースの検討会を頻繁に行ったり、あるまちの保健師さんからスーパーバイズを頼まれています。大事なものは、互いの役割分担がしっかりできることだと思います。若い保健師さんなどは、経験の蓄積がまだまだ少ないので、頼ってくれています」

電話相談よりも、オンラインの方が、双方が共鳴しあう瞬間が早く訪れることが分かりました。今まで、電話という情報量の少ないものだけで、よくやってきたなと痛感しましたね」

オンライン相談は、適切な支援メニューを提供できるので、これからもっと展開していくべきツールだと思っていると松岡さん。今では、赤ちゃんの子育て相談では、必ず「赤ちゃん見せてくれない？」と言うようにしているそう。それにより、赤ちゃんに触れるお母さんの様子や、子育ての状況を見てとれるからだ。

一人一人のお母さんの相談が、実は他の多くのお母さんを救う鍵に

松岡さんは、これまで数えきれないほどたくさんのお母さんの相談に対応してきた中で、気づいたことがあるという。

「お母さんの中には、子育てがうまくいかず、しんどくて、自信を失っている人が少なくありません。でも、私たちはそういう人たちの相談に答える経験が積み重なっているの、『同じ話、よく聞くのよ』と言ってあげられます。するとお母さんたちは一

世の中の情報量の多さに混乱をきたすママたちもいる

ところで、20年間の支援活動の中で、相談内容は変化してきているのだろうか。それについては、変わらない相談もあるし、変わってきた相談もあるとのことだ。

変わらないのは、「子どもに対する理想と現実のギャップについて」と、「母親という役割に対するプレッシャーについて」の相談が多いことだ。一方で、変わった点については、社会の情報量の増加が大いに関係しているという。

「以前は、離乳食の相談や肌着の着せ方の相談など、圧倒的に情報を求めてくるお母さんが多かったのです。でも、今は、インターネットが普及して、情報が山のようにあふれています。それによりネット情報に自分の子どもが当てはまらず、混乱して相談してくるケースが多くなっていますね。」

また、情報があまりにも多くて、自分がやっていることが正しいかどうか分からなくなってしまうお母さんもいます。まず子どもの反応を見れば分かるはずなのですが、今のお母さんは外部の情報を感じてしまいがちで、自分で反応を見る目が鈍

様にほっとしてくれます。

一度思い切って正直なところを発信してくれると、それに答えるノウハウがふくらんでいって、私たちの役に立つだけでなく、他のママたちの役にも立っています。だから、臆することなく発信してほしいのです」

保健師さんたちへ望むのは「個人個人を見てほしい」

では、松岡さんは、今後の展望についてどう考えているのだろうか。それを尋ねると、「特にない」というのが答えだった。

「お母さんたちに何かが起こって、必要となったら新しい支援を考えるかもしれません。でも、今はこれまでどおり、一つ一つの相談に答える作業がとても大事だと思っています。あくまでも、『ママと子どもの笑顔のために』をミッションとして、ぶれることなく続けていきたいですね」

普通の主婦をしていたら、こんなにいろいろな人とのつながりができなかつたし、こんなに多くの財産をもらえることはなかつたので、「これまで続けてこられたことに感謝しかない」という松岡さん。最後に、保健師さんに対する希望を語ってもらった。

くなっているのかもしれない」

新型コロナウイルス流行以降 オンライン相談を始める

それでは、新型コロナウイルスの流行以降については、何か変化があるのだろうか。「4月くらいからは、健診や母親教室が中止になってどうしようという電話が多く入るようになりました。また、私たちが直接会って面談することもできなくなりまして。そこで、急ぎよ、LINEを用いたオンライン相談を始めたのです」

このことが、新たな気づきや展開につながっていったそう。

携帯の映像から、母子の表情や家の中の様子がリアルに分かる。周りを走り回っている上の子との関係性まで伝わってくる。

あるお母さんとLINEでつながったときには、車中いることが分かった。

「旦那に赤ちゃんを押し付けて来たが、もう限界。子どもを虐待するかもしれない」と映像の中で泣き始めた。

「電話だったら、声のトーンやすすり泣きなどは分かっても、表情や車中にあることまでは分からず、その緊急性やしんどさの度合いまでは把握できなかったでしょう。」

「ここ数年ですが、ママに同行して私たちがどこに来てくれる保健師さんも増えていきます。これは、ママと保健師さんの信頼関係が出来ていないとできないことですよね。保健師さんには、頑張っているママたち個人個人をよく見てほしいです。そして、健診などの緊張する場では、お母さんのパワーになるような肯定的な言葉をかけてくれるといいと思います」



団体名のMCはMamaとChildの頭文字から。設立当初から一貫してママと子どもをサポートする